

財団法人

日韓文化交流基金 NEWS

no.26



青少年交流ケーススタディーズ 学生団体 / 学校 / 市民団体
助成事業紹介 韓国国立中央博物館の日本近代美術品コレクション

2	●巻頭エッセイ 小説家・李清俊のこと	渡辺直紀
3	表紙使用作品および表紙作家紹介	
4	●特集 青少年交流ケーススタディーズ 学生団体 / 学校 / 市民団体	
8	●助成事業紹介 韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術展 「韓国国立中央博物館の日本近代美術品コレクション」	金承熙
10	日韓文化交流基金事業報告	
12	●フェロー研究紹介 『交隣須知』の基礎的研究	片茂鎮

巻頭エッセイ

小説家・李清俊のこと

渡辺直紀 ・ 高麗大学校国際語学院客員専任講師



李清俊（イ・チョンジュン、1939～）
[写真提供：朝鮮日報社]

イ・チョンジュン
李清俊氏については、90年代初頭に日本でも公開された映画『風の丘を越えて—西便制』^{イム・ワンテク}（林権沢監督・原題『西便制』）の原作『南道の人』などの他にも、いくつかの翻訳を通してつとに知られている。職人精神に透徹した人間が時代の変化に追い付けずに滅びゆく姿を好んで描くとされるこの作家は、しかし、それのみならず実に多様な趣向の小説を書き分けてきた。この2月に完結したばかりの全集25巻などを一読してもそれは充分納得できるが、なかでも、長篇『あなたたちの天

国』などを見る時、この作家がいかに現実社会の問題点を探ろうとし、その克服に苦心してきたかが分かる。文学と知性出版のこの作品がこの2月に100刷（30万部）を突破した事実から見ても分かるように、韓国の読者たちも、むしろそのような李清俊の作品活動を長きにわたって支持してきたのである。

『あなたたちの天国』は1974年から『新東亜』誌に連載され、76年の連載終了と同時に単行本として刊行された。主人公は趙白憲^{チョー・ベクホン}という軍医で、彼が全羅南道・小鹿島^{ソロクト}にある癲病患者の隔離施設・小鹿島病院（植民地時代に建てられ、現在も療養所として実在）の院長として赴任してからの一連の出来事が、同じ病院に勤める職員の男の視点を通じて描かれる。「楽園建設」の美名のもとに数々の事業計画を立て、実際の労役に患者たちを動員



左 Knowledge in Idle Box
レジンキャスト、ブラックライト、絹ほか
右 Reality and Virtual Reality
ミクストメディア (DVDほか)
インスタレーション、2003年、海岸通CASO

協力 (敬称略)
KEUMSAN GALLERY (ソウル)
加藤義夫 (インディペンデント・キュレーター)
千葉由美子 (ユミコ・チバ・アソシエイツ)

表紙作家紹介 姜愛蘭 (カン アイラン)



1960年韓国ソウル生まれ。梨花女子大学卒業、多摩美術大学修士課程修了。現在、梨花女子大学校助教授。最近の主な展覧会に、「アジアの世紀のはじまりにPART Ⅲ - 中国と韓国の現代彫刻 -」(グループ展、海岸通CASO、2003年)、「メディアアシティソウル2002」(グループ展、韓国・ソウル市立美術館、2002年)、「本の重み 本のあかり」(個展、ビューイングルームヨツヤ、NADIFF、2000年)ほか。2000年から本をモチーフにした「Book Project」のシリーズを連作している。

作家の言葉

「……本はもちろん人々に悪い影響を与えることも、私たちの生を堅苦しく制限的にすることもありますが、同時に私たちの生を潤いとゆとりのあるものにしてくれる。また、本は人々に生の目標となるものを与えたり、それを悟らせてくれる。本はこのような肯定的・否定的の影響を与え、多様かつ密接に私たちの生と結びついているのだ。……しかし、このような本は21世紀が始まる、いま、この時点で、その存在意味を試されている。……私はこの問題点に、実在と仮想(Reality and Virtual Reality)というテーマの制作によって接近する。今までの本の意味と役割を確かめ、21世紀の選択に対してわれわれ皆が考える契機とすることが私の願いである。」

「作家ノート」(『AIRAN KANG』a&a, ソウル、2001年)から

する趙院長と、職員、患者たちとの間に繰り広げられる様々な物理的・精神的葛藤は、「善意の独裁」がいかに虚妄であるかを物語る。いかに美しい内容で彩られていようと、それが一方通行な手続きで「施される」ならば、それは決して被治者の「天国」や「楽園」などにはなり得ない——このことを、李清俊は巧みな状況設定と人物描写で見事に描き切ったのである。

李清俊は全羅南道・長興の出身である。私の知る全羅道出身の作家の多くは、彼も含めて決して地方色一辺倒に傾くことなく、しかし、全羅道の片田舎・光州・ソウルの三つの点をつないだ線、いや「道」のようなものを、作品を通してよく感じさせてくれる。光州事件を素材として描いた長篇『春の日』の林哲佑もそうだし、また「光州」の一点は落ちるが、若

い女性作家の代表格で、ここ数年ベストセラーを出し続けている申京淑などもそのような作家だろう。それは全羅道という地域が、中央との関係において絶えず因縁の地だったからということか。そのような「道」でさまよいながら暗闇の中に痕跡を残すがごとく創作に専念する李清俊も、間違いなく、韓国現代史の一側面を熾烈な作家精神で告発した人である。ただ一方で、私のような外国の読者が、そのように作品の中で提示された状況を、単なる「風景」と見ることに満足していいのだろうかとも考える。

韓国の作家たちが日本をはじめとする外国の作家らと交流する場に立ち会う機会がたまにあるが、通訳などをしながら聞いていると、彼らの話題には実に国境がない。互いの作品を読んだことがなくても、様々な外国作家の名を挙げながら、

自らの趣向を知らせたり相手の趣向を探ったりする。そのような場に居合わせた私は、このような時、文学の国籍など便宜的なものだと感じる。しかし一方で、李清俊のような作家のことを考えると、文学の国籍や地域性は、解体され普遍性に還元されるべき何物かなどではないだろうとも考える。——李清俊の作品を読む時に考えさせられることは、一作品に対する鑑賞を離れてこのように実に多い。



わたなべ なおき

1965年東京生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。94年に渡韓、東国大学校大学院博士課程修了(韓国近現代文学・比較文学専攻)。2000年3月から現職。著訳書に『思想読本』6 韓国(川村湊編、一部分担執筆/作品社、2002)『韓国の近現代文学』李光鎮編、尹相仁と共訳/法政大学出版局、2001)など。wata2002@hotmail.com

青少年交流ケーススタディーズ

学生団体 / 学校 / 市民団体

青少年交流の促進は、当基金の事業の柱のひとつです。

人物交流助成においても青少年交流は重点支援対象ですが、

特に今年から開始された日韓両国政府の「日韓共同未来プロジェクト」により、当基金でも民間の青少年交流に対する支援をさらに強化しています。

今回の特集では、数年にわたって青少年交流プログラムを継続しているグループを取り上げ、活動を続けていくためのノウハウやプログラム上の工夫を紹介します。

青少年の交流は、大別して１．学生団体 ２．学校（小学校～高校） ３．市民団体によるものがあり、年齢層だけではなく、それぞれ成り立ちや目的、プログラム内容も異なり、取り組む課題や実施上乗り越えなければならない問題にも差異があります。長く地道に活動をしている団体・グループは、プログラム実行上の知識と経験をそれぞれに積み重ねています。

大学生間の交流では、関心領域に

じた有志のサークルや、ゼミ同士の学術交流など、最初から目的に応じてメンバーが集まることが多く、プログラムも研究や学習の発展上にとらえることができ、言葉の障壁も比較的容易に克服することができます。しかし、メンバーの入れ替わりが不可避で、特に有志のサークルでは参加の自由度が高いため、過去からのノウハウと問題意識の継承と、現メンバー同士や日韓のカウンターパート間での情報の共有と

いう、時間と空間の拡散の問題をいかに克服するかという問題があります。

小学校・中学校・高校での学校間の交流では、通常、教師・父兄が企画から実行までの「事務局」の役割を果たすことになります。準備段階から学校の通常の教育活動（国際理解教育など）の中に活かしていく工夫とともに、韓国側と意思疎通をする手段の確保が必要となります。学校の中のみならず、地域の人々や機関と連携して取り組むことが成功のカギとなります。

市民団体による交流では、市民のボランティアがそれぞれの得意分野や職歴でつちかった能力を生かして、日ごろの国際交流活動が行われ、その上で地域に根ざしたプログラムとして、青少年交流が実施されます。地元で根ざした活動は、地域での日韓交流・国際理解の促進に大きく寄与し、青少年交流は地域を担う次代の人材を育成するという目的も含んでいます。

魅力的で充実したプログラムの開発・実行は、ノウハウもさることながら、企画者・参加者双方に交流の楽しい記憶を残し、それが次のプログラムへの精神的な原動力にもなっているように思えます。



日韓学生会議・分科会議



黒石小学校ホームステイ交流
ソウル黒石初等学校にて

1. 学生団体による交流 - 知識と問題意識の共有のために

● 日韓学生会議

1985年に日韓の有志の大学生たちによって設立された「日韓学生会議」「韓日学生会議」は、1986年の第1回以来、毎年夏に日本と韓国を相互訪問し、今年2003年には第18回の東京大会を開催するに至りました。

日韓学生会議の18日間のプログラムでは、分科会の会議に最も大きな力点

日程(2002年東京大会)

1日目	開会式、オリエンテーション
2-6日目	分科会議、交流活動 (スポーツ、文化交流など)
7日目	分科会議報告書作成
8-9日目	シンポジウム、講演会
10-14日目	今市市でのプログラム (フィールドトリップ、高校生との討論会など)
15-17日目	同友会主催企画、 家庭訪問ほか フェアウェルパーティ
18日目	韓国側帰国

日韓学生フォーラム

1986年に日米学生会議の有志が韓国国際学生協会に働きかけてソウルで実現した試験的な討論会から始まった活動は、今年で19回目を数えます。昨年の第18回は、韓国慶州・ソウルでのプログラムに、日韓総勢36名が参加しました。フォーラムでは討論を英語で行い、また、日韓の歴史に関係の深い場所を共同で訪れるなどのフィールドトリップにも力を入れています。フォーラムは日本国内では関東と関西の部会があり、ホームページの掲示

をおいています。毎年6つ程度の分科で、日韓の外交関係、政治、社会、文化比較などについて、定例の活動で重ねてきた研究・討論を土台に、日韓の学生による発表と意見交換を行います。学生が言語上の壁をなるべく気にせず討論に集中できるよう、会議ではボランティアの通訳を入れています。

夏の行事が終わった直後から、本プログラムに参加したメンバーが次年度に向けて引き継ぎを開始します。通常の活動は週1回の定例会を中心に行われますが、資金計画や新規メンバーの勧誘計画に始まり、徐々にメンバーを増やしながら、日程、分科会内容を詰めていき、最終的には日韓双方で15名前後が代表として参加します。定例会では、韓国や日韓関係に関する勉強会や、韓国語教室を開くほか、フィールドワークや外部講演会などに参加することにより、すべてのメンバーが日韓のさまざまな問題について知識のレ

板を用いたり、昨年から日本国内の遠隔地のメンバーがインターネット上で勉強会を行う新しい試みを取り入れるなど、東京中心になりがちな活動を関西でも活性化させるための工夫を続けています。
<http://www.jksf.net/>

日韓環境ギャザリング

日本全国の大学生の環境サークル・NGOのネットワーク「エコ・リーグ」と、韓国の学生環境NGO「グリーン・ネットワーク」(本部・大邱)による交流会



文化交流—韓国の文化紹介



シンポジウム—分科会議を踏まえて

ベルを高めていきます。

毎回、活動の詳細を記録した報告書が作成されるほか、「日韓学生会議新聞」とホームページを広報と記録のメディアとして使っています。また、OB組織である同友会は、最も身近な理解者として現学生メンバーのサポートを行います。80年代初めの教科書問題を契機に立ちあがった会議の問題意識は、今のメンバーたちにも受け継がれています。

<http://tokyo.cool.ne.jp/jksc/>

「日韓環境ギャザリング」は、本年度で第6回目を迎えます。2団体は共に大学でのエコロジー活動を主目的にしており、本企画でも両国における大学でのエコロジー活動などに活きるようにフィールドワークやワークショップ中心のプログラムを組み、学生の立場から身近な環境問題を実感し、情報と問題意識を共有するために、現場に実際に足を運んで考えることを重視しています。

<http://www2.biglobe.ne.jp/~eleague/>
(エコ・リーグ)

2. 学校間の交流（小学校～高校） - 教育活動に活かされる交流

● 黒石小学校ホームステイ交流（黒石小学校PTAホームステイ交流委員会）

青森県黒石市は、ソウル直便のある青森空港から車で35分程度の場所に位置しています。

黒石市立黒石小学校（長谷川隆之進校長、全校児童 301名）とソウル黒石



ユニノリ遊びでもうすっかり友だち

初等学校との姉妹校交流は、同名の学校があるという偶然の発見から始まり、今年で4年目を迎えました。

両校の交流では4～6年生を中心にした児童10数名が、毎年、相互訪問をしています。

プログラムは3泊4日程度の日程で、ホームステイを日程の中心に据えながら、授業参加などお互いの学校生活も体験できる企画が立てられています。普段の遊びを通じて交流することを心がけ、この地域伝統の「黒石よされ」と一緒に踊ったり、竹馬や一輪車で遊んだり、体を動かす体験プログラムが盛り込まれています。

黒石小学校ではパソコンを使った交流に力を入れています。ホストファミ



韓国の遊びチェギを体験

リーの中には自動翻訳ソフトを使ってメールのやりとりをしている家庭もあります。国際交流担当教員がソウル日本人学校に赴任した経験があるため、プログラムの準備段階でもインターネットのチャットで日本語と韓国語両方を使い、コミュニケーションを取っています。準備は担当教員とPTAの10名程度が協力しあい、また地域の在日の人々の協力も得ながら進められます。

イベントとしての交流のみならず、普段の学校生活でも総合的な学習の時間に、国際理解教育として韓国語や韓国文化の学習を行い、子どもたちがより深く学べるよう工夫されています。

<http://www.infoaomori.ne.jp/kurosho/>

日 程	
訪韓	訪日
1日目 到着、ホストファミリーと対面	1日目 到着、ホストファミリーと対面
2日目 授業参加	2日目 授業参加、全校交流会
3日目 お別れ会、ソウル市内史跡見学	3日目 帰国
4日目 帰国	

名護屋・萬徳小学校ホームステイ国際交流（名護屋小学校PTA）

佐賀県の鎮西町立名護屋小学校は、2000年より全羅南道潭陽郡の萬徳初等学校とのホームステイ交流を実施しています。両校の6年生20名が4泊5日の日程で訪日・訪韓し、ホームステイの中で人々とふれあい、相手国の文化を体験します。名護屋小学校は近くの佐賀県立名護屋城博物館から韓国人国際交流員を招き、普段から授業の中で韓国語や韓国文化を

学んでいます。交流も回を重ねるごとに、父母や地域の韓国に対する関心が高まり、最近では学校、PTAのみならず、地域ぐるみで交流を応援しようという動きに結びついてきています。

日韓高校生スポーツ交流・史跡フィールドワーク交流（京都府立乙訓高等学校野球部保護者会）

国際理解教育を推進している京都府立乙訓高校では、ソウル高校と野球部間の

交流を行っています。両校の生徒が3泊4日の日程で訪問しあい、野球の交流試合を行い、同じポジションの生徒の家にホームステイするというプログラムです。2001年から始まった交流も今年で3年目を迎え、野球部保護者会の非常に熱心な取り組みで、両校の間に仲間意識が生まれています。京都韓国学園も試合や交流に参加し、日韓のみならず、地域の在日の人々を含めた三者間の交流が築かれています。

3. 市民団体による交流 - 地域に根づき、次世代を育てる

- 日韓学生交流の旅（日韓市民ネットワークなごや）

1998年に名古屋国際センターの「韓国理解講座」がきっかけとなって発足した日韓市民ネットワークなごや（統括幹事・後藤和晃さん、会員120名）は、名古屋市とその周辺都市の市民の中で韓国に関心を持つ人々が、両国の交流と友好を目的として設立した民間組織です。日頃より地域の韓国留学生との交流に力を入れており、愛知県韓国学園などの在日関連団体とも協力し、活動を行っています。会員たちはボランティアで、各自の得意分野を生かして運営に参加しており、現在は、会員

日 程（2002年）

- | | |
|-----|----------------------------|
| 1日目 | 到着、独立記念館など見学 |
| 2日目 | 公州・扶余見学、
光州でホストファミリーと対面 |
| 3日目 | 晋州城、松広寺見学、ホームステイ |
| 4日目 | 自由行動、ホームステイ |
| 5日目 | ソウルにて京畿大などの学生と交流 |
| 6日目 | 自由行動、帰国 |

各自が交流イベントなどを企画することを応援しようという「交流リーダー事業」を展開中です。

会には学生から高齢者までの幅広い層の人々が集まっていますが、戦前に朝鮮半島で生まれた世代も含めた中高年が積極的に活動する中で、若い世代にもより深い関心を持ってもらいたい、次の世代を育ててゆきたいという願いから、学生交流のプログラムが実施されるようになりました。

「日韓学生交流の旅」は2000年に始まりました。韓国側では大邱韓日親善交流会と光州YMCAが1年ごとに受け入れ団体となり、慶尚道と全羅道を交互に訪問するプログラムが組まれています。5泊6日の日程で、日本の学生たちはホームステイをしながら、ホストファミリーの韓国留学生と一緒に



日韓の学生たち（2000年8月）

に史跡見学を行います。日本とかがわりのある史跡と一緒にめぐる中で、学生たちは歴史を学びながら、日本と韓国の未来のことを考えたという感想を残しています。プログラムを終えた後、韓国に留学する学生も多いということで、若い世代の韓国理解をめざした事業の成果は着実に広がっています。
<http://www.is-mirai.ne.jp/nikannet/>



文禄・慶長の役の激戦地晋州城を見学（2002年2月）

浜岡国際交流協会ホームステイ交流
静岡県浜岡町の浜岡国際交流協会は1987年に発足した市民団体です。これまで16年にわたり清州大学校や清州国際交流協会を主なカウンターパートとして、韓国との交流を続けてきました。韓国の一行が訪日する際は、全日程を通してホームステイで受け入れ、海水浴、工場見学、京都・奈良旅行など多彩なプログラムが用意されます。また、終了後には感想文集を作成し、これまでに20号が刊行されています。浜岡国際交流協会ではこの他に、日韓の小学生の絵画交流や、留学生との交流なども行っています。

ICAS日本文化紹介プログラム（ICAS国際都市仙台を支える市民の会）

ICASは日本語講座、日本語教師養成講座、日本文化紹介などの事業を行っている団体です。1998年より光州で、生け花、着付、茶道などの日本文化紹介事業を開始し、2000年からは東北大学の学生国際交流グループ“@Home”とともに、全南大学校、湖南大学校との交流を行っています。学生間の交流では、毎回「大学生の親族意識」「教科書問題」などのテーマを立ててシンポジウムを行い、真剣な討論を交わす中から学生たちの仲間意識が生まれています。

韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術展

「韓国国立中央博物館の日本近代美術品コレクション」

韓国国立中央博物館学芸研究官 金承熙

1. 日本近代美術品の展示

2002年10月29日、韓国国立中央博物館の企画展示室では、当館所蔵日本近代美術品の特別展示が始まった。これらの美術品は、1943年3月まで韓国の徳寿宮石造殿で陳列されていたもので、日本の敗戦以後一度も公開されたことがなかったものである。特に、近代美術史を研究する韓国の学者と日本の多くの関係者から、今回の公開は千天の慈雨のように長く待望されていたことだろう。この展示会に多くの日本人観客が訪れたことは多少予想外だったが、韓国国内の一般人の関心も非常に高く、期待以上の観客動員となった。今回の展示で心配していた、韓国の観客の日本美術に対する先入観は見られず、日本の芸術品は国籍を越えた芸術品であるということを感じた。

1990年代初めからすでに日本のさまざまなマスコミが、韓国国立中央博物館に所蔵されている日本近代美術品の公開、あるいは日本への貸与を粘り強く要望してきた。これをきっかけに、当館では、韓国でまず公開してから貸与するという方針を定めた後、所蔵日

本近代美術品についての調査と研究を進めた。特にサッカーW杯の日韓共同開催が決定した1996年以後は、今後展開される両国のスポーツおよび文化交流に対する両国民の期待が高まると予想していた。また所蔵日本画部門に関する韓国の研究者の調査研究もある程度完成段階に入っていたので、2002年W杯の開催前の2000年に韓国で公開し、その後日本に貸与するという見通しも立っていた。

しかし、韓日両国の微妙な関係ゆえに、文化行事をとりおこなう場合、さまざまな事項に配慮が必要である。この二国が世界的な祭典であるW杯を迎えるのであるから、相手の文化を真に理解することを願い、問題に取り組んだ。当館所蔵の日本近代美術品の場合も、一部作品は日本の強い圧力によって李王家美術館が購入したということと、作品自体に日本の固有の色が強いという理由などで、慎重に行事の実行を決定しなければならなかった。しかし、当時まったく予測できなかった日本の歴史教科書問題が明るみに出て、その波紋で2001年にはいくつかの文化行事が、中止や延期の事態となった。そのため、当館の日本近代美術展の計画も先送りせざるをえなくなった。そのような経緯を経てようやく、2002年に韓国国内展を無事盛況のうちに終え、本年日本に巡回することができたのは、慶事というほかない。

2. 日本近代美術品所蔵の歴史的意義

韓国国立中央博物館には、日本近代美術品198点が保管されている。部門別に、日本画93点、洋画37点、版画4点、彫刻20点、工芸44点である。これらの作品は1930年代に李王家美術館が購入したものと、作家や日本人コレクターによって寄贈されたものである。

李王家美術館は、大韓帝国の正宮だったソウルの徳寿宮に建てられた2棟の洋式の石造の建物で運営されていた。1910年に完工した石造殿(旧館)は、高宗が外国の賓客に接見する場所として使われていた建物だったが、1933年以降、日本近代美術を展示する美術館として使用された。もうひとつの石造殿(新館)は、1938年に既存の石造殿の西側に建てられ、伝統的な朝鮮の美術品を展示していた。1909年11月に最初に昌慶宮に設立・運営された李王家博物館(大韓帝国皇室博物館)を前身として、1933年10月の日本近代美術専用館の開館を経て、1938年の新館の開館により新たに「李王家美術館」の名がつけられた。

石造殿美術館は、当時日本においても例をみないほど、施設面、内容面で充実した近代美術館だったという。同館では、開館翌年の1934年から、陳列された日本の近代美術品を本格的に購入し始めた。以後、毎年10数点の作品を、1945年まで大きな資金を投入して購入した結果、石造殿美術館は年々権威が高まり、日本の有名な美術



徳寿宮李王家美術館全景

作家さえ作品が展示されることを望むほどになった。日本の作家から寄贈された作品の数は毎年増加していった。

3. 日本近代美術品展示の現代的意義

徳寿宮石造殿に日本近代美術品が展示される過程は、当時の日本文化界の有力者たちによって立案・実行されていった。なかでも、東京帝国大学名誉教授黒板勝美は、朝鮮総督府事業に積極的に関与し、政策の立案から実施にいたるまで、多方面にわたる植民地文化戦略を駆使した人物であった。彼は当時朝鮮の美術品を収蔵・陳列していた昌慶宮李王家博物館の存在と、考古歴史中心の古遺物を陳列した朝鮮総督府博物館の状況を熟知しており、総督府が標榜する朝鮮の植民地文化政策の構図に従って、新しく改修される石造殿の展示を日本の近代美術品に限定したのである。

黒板は、当時日本にある多様な美術団体の展覧会を包括する日本近代美術の総合展覧会をソウルで実現したのであった。日本の美術団体との話し合いなどを経たのち、1933年9月には、石造殿開館にあたって陳列される美術品として、日本画44点、西洋画40点、美術工芸品47点、総131点の展示作品が確定発表されるに至った。

徳寿宮石造殿に展示された作品は、当時の日本美術の頂点を示すものといっても過言ではないだろう。13年間の日本近代美術の展示は、韓国の現代美術の形成に直接・間接的な影響を与



(上) 京都国立近代美術館での展示風景
(下) 韓国国立中央博物館企画展示室日本近代美術展展示場面

【写真提供】
8ページ、9ページ下：韓国国立中央博物館
9ページ上：京都国立近代美術館

えた。1922年から朝鮮総督府で主管した「朝鮮美術展覧会」は、当時の日本「帝国美術院展覧会の支店」という酷評にみられるように、出品作品の多くは石造殿に陳列された日本美術品の「官展風」を模倣していた。朝鮮美術展覧会では、日本人作家が審査委員になる場合が多く、徳寿宮に陳列された日本美術品は将来作家になろうとする朝鮮の美術家たちのモデルになったともいえる。

このような理由から最近の韓国の若手美術史学研究者らは、自国の現代美術の形成に及ぼした日本近代美術の影響に注目し、李王家美術館の日本美術コレクションだけではなく、日本近代美術に対して多くの関心を示している。

これらの作品は今日韓国国立中央博物館の日本近代美術品コレクションを形成し、いまや再認識の対象となり新たな解釈を待っている。当館では所蔵

日本近代美術品を積極的に研究し、漸次公開しようと考えている。今回の展示は日本画と工芸部門に限定したが、これらは韓国国内の研究者によってすでに整理された部分である。最近韓日の文化交流が活発に進められている中、当館所蔵の日本近代美術品は、両国の歴史と文化を理解する真のパートナーシップの掛け橋としての役割を果たすものと信じて疑わない。

「韓国国立中央博物館所蔵日本近代美術展」は、2002年10月に韓国ソウルで開催された後、東京藝術大学美術館（2003年4月3日-5月11日）、京都国立近代美術館（2003年5月20日-6月29日）に巡回した。



キム スンヒ

弘益大学校大学院で美術史を専攻し、美術専門誌記者として現代美術に関する多くの文章を発表した。現在韓国国立中央博物館美術部に勤務。近世美術に関心を持ち、日本近代美術展の韓国国内展を担当した。著書には仏教絵画を研究した『甘露帳』(共著)などがある。

2003(平成15)年度下半期 助成申請について

平成15年度下半期(10月 - 来年3月)に実施される青少年・草の根交流、国際会議・シンポジウム、芸術交流などを対象とする人物交流分野の助成申請を、7月1日(火)から8月1日(金)までの期間で募集いたします。申請案内および申請用紙は、基金にて配布・郵送を行っているほか、基金のウェブサイトからもダウンロードできます。申請書は締切日必着で基金まで郵送してください。なお、申請書類の提出に先立ち、事業計画について助成担当者

までご相談されることをお勧めします。

なお本年度より、参加者が青少年や大学生中心で、フィールドワークや交流行事に参加者の能動的な参加が求められるプログラムについては、日韓両国政府による「日韓共同未来プロジェクト」として採用され、その名称が付与されます。

韓国図書翻訳出版事業 「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

以下の図書が韓国図書翻訳出版事業の一環として法政大学出版局から刊行されました。

『韓国の歳時習俗』(張鶴根著、兎玉仁夫訳)(原題同じ、1984年刊行、蜚雪出版社)

元旦、端午、七夕、秋夕など、毎年季節ごとに繰り返される年中行事は、日常の俗の生活を離れた祝祭の時間として家族や親族、共同体によって連綿として営まれ、民族の伝統文化を形成してきた。韓国における歳時習俗の起源を初期村落国家の農耕儀礼にもとめ、村々の祭りや年中行事が儒教や仏教、曆法(太陰曆)や自然条件とのかかわりでどのような歴史的変遷を辿ったかを考察しつつ民族文化史に位置づける。

訪日団

団体名	計	男	女	期間	団長
教員(中学校)	20	7	13	5/13-5/22	金憲洙 教育人的資源部 国際教育協力担当官室 教育研究官
教員(高等学校)	20	13	7	5/13-5/22	柳明圭 国際教育振興院 企画管理部部長
教員(初等学校)	20	9	11	5/20-5/29	具光會 国際教育振興院 国際交流部教育研究士

訪韓団

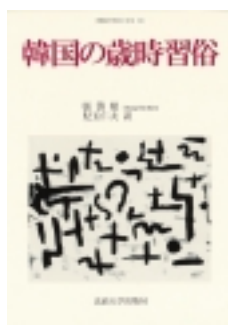
団体名	計	男	女	期間	団長
大学生(1)	20	7	13	5/27-6/5	土佐昌樹 国士舘大学21世紀アジア学部教授

中高生訪日団

団体名	計	男	女	期間	学校訪問先	団長
中学生(1)	100	49	51	6/3-6/7	福岡市立原中央中学校	魯昌洙 光州広域市教育庁奨学官
中学生(2)	100	47	51	6/17-6/21	福岡市立高宮中学校	河之好 慶尚南道教育庁奨学官
高校生(1)	90	45	35	6/24-6/28	大阪府立鳳高等学校	金弘燮 ソウル特別市教育庁奨学官

引率者を含まない人数

さらに、『冽陽歳時記』『東国歳時記』など朝鮮朝後期の歳時記に記された歳時習俗と現代韓国で行われている歳時習俗とを比較対照し、近代100年の社会風俗の変貌を浮彫りにするとともに、中国・日本との比較を通じて東アジアの多彩な民俗文化を描き出す。



図書センター

2003年(平成15年)4月より下記の通り、正式に開館時間の延長を開始いたしました。

●火曜日・木曜日 10:00～19:00
(1時間延長)

●なお、月曜日・水曜日・金曜日は従来通り、10:00～18:00です。

日韓歴史共同研究委員会

5月24日(土)、ソウル・新羅ホテルにおいて、「日韓歴史共同研究委員会」の第3回全体会議が開催されました。

本委員会は、昨年5月に日韓関係史に関する専門家による協議の場として設置されたもので、第1(古代史)、



日韓歴史共同研究委員会
第3回全体会議

第2(中近世史)、第3(近現代史)の分科会において両国の歴史研究者が日韓関係史上の諸問題について共同で調査研究を行っています。

全体会議では、各分科会の調査研究の進捗状況についての報告を行った後、全体の今後の進行に関する課題についての意見交換が行われました。

図書出版助成 対象図書刊行

坂井俊樹著『現代韓国における歴史教育の成立と葛藤』(御茶の水書房、2003年6月刊行)

解放以後の韓国の歴史教育の推移を日韓関係の各段階に関連づけ、明らかにする。解放後の韓国では、日本の植



民地期に植えつけられた植民史観の克服が長い間の課題であった。その過程を具体的に歴史教育の営みの中に探ると、韓国だけの問題ではなく、戦後の日本人の歴史認識のあり方と相互関連の構造が見えてくる。

理事会

4月10日に第32回理事会が開催され、2003年度の事業計画案および予算案が承認されました。また、6月6日には第33回理事会が開催され、2002年度の事業実績および決算が承認されました。役員の変動は次の通りです。

理事

新任 三木繁光(全国銀行協会会長、4月22日付) 三村明夫(社日本鉄鋼連盟会長、5月28日付)

退任 寺西正司、千速晃

『交隣須知』の基礎的研究

片茂 鎮 檀国大学校教授

『交隣須知』なる書は、18世紀から明治初期にかけて、日本で最も広く使われた韓国語の学習書です。日本人の手による最初の韓国語学習書として成立した本書は、1703年ごろ釜山の倭館において編まれ、のち対馬の韓語学所などで韓国語の初級テキストとして用いられました。著者は、一般に対馬藩儒の雨森芳洲(1668～1755)と云われますが、一方では、対馬の通詞たちが編纂したものに芳洲が力を添えたものであるとの説もあります。

本書は約200年間写本のまま伝えられ、明治14年になって初めて活字本として公刊されたわけですが、刊本にいたる間には数多くの写本が存在します。全四巻をもって完結する『交隣須知』は、約3,000の漢字語を見出しに立て、それらの文例を韓国語と対訳の日本語で綴る形で成長してきました。日常生活に必要な語彙を「天文」「地理」といった類義部門に分類し、会話体の文例をもって本文をなすものです。【図】参照)

『交隣須知』は、18、19世紀の、会話体による口語性に富んだなまの韓国語と日本語が書き留められていて、両言語の歴史的研究にとって好資料です。なお同じ内容の本文が各異本に受け継がれていく過程において記録された言語は、当然通時的研究の対象となります。もちろん韓国語と日本語の対訳をなしている本文は、両言語の対照研究にも格好の資料を提供してくれます。しかし、このように両言語の歴史的、共・通時的、対照的研究に有用であるにもかかわらず、言語的な資料として、本書が十分に活用されていないのが現状です。

その主な理由は、『交隣須知』の諸異本に対する総合的、体系的な研究がなされていないところにあると思われる。本書を言語資料として用いるための基本的な研究が不十分であることで、本研究はまず、各異本の正確な書誌的記述に基づく諸本の系統的な関係を明らかにすることを主な目的としています。諸本における体裁的な面はも

ちろん、本文テキストの対照比較、主文たる韓国語の表記法、成立において本書と深い関連性が認められる韓日対訳辞書の『倭語類解』との比較など、多角的で綿密な分析と検討が要求されます。

これまでの『交隣須知』の研究は断片的な、しかも日本で公開された影印本によるものでした。しかしこの種の研究はできるだけ原本に依ることが望まれます。『交隣須知』のほとんどの異本は対馬と鹿児島県の苗代川の地で成長を遂げてきたものであるだけに、両地域における韓国語学習の歴史的背景をもつ現物の写本に照らし合わせていく必要があります。

『交隣須知』の基礎的な研究に必要な、もう一つ重要な作業は、『交隣須知』諸本の翻刻とその索引を作成することです。これまで公開された異本はもちろん、公開されずにいて一般の研究者の手が届かない写本類も含めた、諸本対照の本文テキスト化を進めています。なお索引は、韓日語の語彙(見出し語)の用例文節に対訳を併記し、対照研究の資料性が失われないようにしたものです。この本文の翻刻と索引は、これからの『交隣須知』の研究に有効な資料になるものと思われます。

ピョン ムジン

現在基金フェローシップで麗澤大学大学院客員研究員として日本に滞在中。韓国・檀国大学校語文学部教授。編著に、『明治14年版 釜山図書館所蔵 交隣須知〔解題・本文〕』(弘文閣、1999年)、『対馬歴史民俗資料館所蔵 交隣須知〔解題・本文・索引〕』(弘文閣、2000年)がある。



【図】長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵『交隣須知』(巻一)の表紙(左)と一丁表(右)